

師 中田瑞穂先生の延髄病巣観察

38年間の試行錯誤

ブレイン リサーチ センター 生田房弘



与えられた運命と恵まれた環境への感謝

私がニューヨークのH.M. ジンマーマン先生(図1)の教室から帰国し、曲がりなりにも神経病理学で一人立ちしたいと考えた35歳の時から48年が過ぎた。そのうちの38年間、私の神経とエネルギーのほぼ全てを注いだのは、師の中田先生(図1)と約束した延髄病巣を中心に先生の脳を調べることであった。その剖検記録を私は、先生の今年の命日8月18日に脱稿することとした。その150頁余りのデータを今、辻さんに助けてもらい、纏めている。



左から 神経内科 椿教授、脳外科 植木教授、ジンマーマン先生(65歳)、中田先生(74歳)、生田(37歳)。1967年4月8日、植木幸明先生の教室で。

剖検後の20年間は新潟大学の脳研究所で、その後はこの新潟脳外科病院で18年余、病理部門の武田先生や平田さんの助けを受け、他方では脳研究所の高橋教授や柿

田教授の示唆や援助を戴きながら、今日に至っている。こうした恵まれた環境を与えて下さった院長新井弘之先生始め、理事の方々、そして全職員に満腔の感謝を込めて、これまでの私の迷いと、悩み、試行錯誤の38年間にここに振り返らせて戴きたい。

延髄梗塞の発症と自身の解剖についての遺言

それは、師の中田瑞穂先生が60歳の誕生日を過ぎされた直後の4月30日のことであった。先生は突然、延髄の梗塞によるワーレンベルグ症候群と言われる第1回発作を、すぐ1ヶ月半後、第2回目の発作を起こされた。この症候群で自身で感じられた様々な、微妙な知覚障害のことを先生は極めて詳細極まる自己体験記として、すぐ新潟医学会雑誌に報告しておられる。

この症候群は、殆ど知覚異常だけであるので、ヒトでなければ語られず、1810年代の初頭にG. Vieusseux という医師による自己体験が初めて集会で紹介された。中田先生の記録は医師による二人目の貴重な記録であった。その知覚異常に関する詳細極まる観察に、東大神経内科の豊倉康夫教授が感動され、中田先生の亡くなられる直前にその記録を豊倉先生の視点からさらに検討された貴重な論文のゲ

ラ刷りが末期の中田先生の病床に届けられた。

またあれは、延髄発作の22年後、先生が亡くなられたその年、1975年の4月25日朝のことであった。先生は私を自室に呼び、前夜82歳の誕生日に書かれたという遺言書ともいべき私あての自筆の依頼状で、「自分の脳は、延髄を傷つけないよう、脊髄と共に頭蓋から一塊として摘出し、延髄病巣を中心に調べて欲しい。」旨の封書を、言葉と共に私に渡された。身の凍る思いで拝受した。

それには、極めて残酷に見える解剖方法をとらざるを得ないことをご存知の先生が、弟子の立場を考え、誤解されぬよう「それは自分の遺志」であることを文書として、私に渡されたものであった。

その数ヶ月前のことであった。「本当に自分で観察することの大切さ」について、「自身の観察」こそが科学でも、文学でも、すべて己の考え方の基盤となる重要性についての静かな説諭であった。

延髄の検索に当たっての迷い、悩み

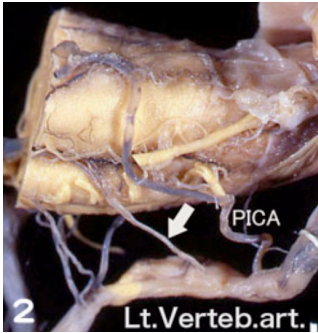
私は先生の遺志通り、全教室員と、大脳から脊髄までを連続させて摘出し、まず、時間のある8月の休みに延髄周囲の血管を実体顕微鏡下で観察し始めた。当時私は7,000例ほどの脳を見せてもらっていたが、どのような脳でもほぼ2時間ほどあればそれらを観察し、顕微鏡標本の切り出しも終わるのが常であった。ところが先生の延髄周囲の血管観察だけで、夏の休みが終わってしまったとき、私はつくづく「本当に観察するということ」の恐ろしさに、まず気付かされたように思う。

もうひとつの迷い、悩み、それは煩惱にたぐいする私の性格と心の問題なのであろうと思う。師の脳にメスを入れるということに、私は無意識に物凄い抵抗を内に感じ、一日一日、その日を延ばし、外表だけを観察していた。もし仮に、私が本当の病理学者であるならば、師の脳であれ、親の脳であれ、淡々とメスを入れ、観察出来て当然のことと知りながら、それが出来ないでいる自分を幾たび情けなく思ったことか。

ついに意を決し、先生の大脳や小脳にメスを入れたのは、もうあとのない、大学を退官する直前の1994年の暮れになってしまった。しかしなお、先生の延髄をどうすれば、先生の観察記録に耐えられる本当の観察が出来るものか迷いに迷い続けた。延髄のどこで切断し、顕微鏡切片を切り出したら良いものか。限りなく、様々な迷いが私の前に現れた。

延髄の病巣分布に思うこと

やがて私はこの病院に移った。再三悩みの末、「先生が推測された第1回発作と第2回発作病巣の中間点にまず割を入れるのが良い。」と考えた。さてそれはどこか？結局、



矢印：閉塞小動脈分岐.PICA 後下小脳動脈.

色々な解剖書を見較べた末、それは脳橋と延髄境界から8.0mmの処とようやく考えついた。そして、延髄の連続切片作成を頼み、その観察を続けた。

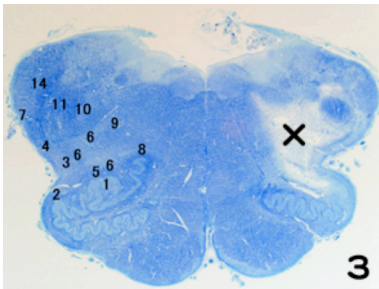
実は既に剖検後まもない1977年、私は動脈硬化で完全閉塞していた

左椎骨動脈から分岐する、1本の名も無い、細い小

血管が閉塞していることを認めていた (図2)。

ところが、この延髄病変の分布はこの小血管の支配領域と全く一致していることに気づいた。驚きでもあった。それは1800年代以来、ワーレンベルグ症候群を起こすと広く信じられてきた、後下小脳動脈とは全く別の、一本の名も無い小血管であった。

その第2回目発作の予測レベルにおける実際の病巣分布 (図3) も、中田先生によって推測された第1回目の病変分布図 (図4) と恐ろしく似ていた。即ち先生の「病巣はいづれもどうしても延髄の左半でしかも側方から背側方で比較的表層のあまり延髄深部でない部分に血行障害があったものと考ふべきものようである」の記載通りであった。



迷走神経が出るレベルの病変 (X).

ただ私は、中田先生の延髄にみられたこれらの病変を見て思うことは、ともすれば第1回目発作の際に、この1本の閉塞した分岐小血管の全領域、すなわち

第2回目の発作として先生が考えられたレベルまで一気に、軽い乏血状態となって不完全な梗塞を生じ、1ヶ月半後の第2回目発作は、余震の様な形の部分的完全閉塞で、先生が推測された延髄辺縁部の梗塞がその一部に重なりあったのではなかろうかと思われてならない。

なおこの延髄病変以外、先生の脳には、大脳の微小な血管周囲性小梗塞の他、特記する異常はなく、加齢を示す神経細胞変性も全く見られなかった。

検索を待ち続けて下さった方々へのお詫び

中田先生のこの延髄病巣の分布を、誰よりも知りたいと思っておられたのは、中田先生の自己観察記をさらに分析された豊倉康夫先生であり、二人目は中田先生が日本のカハールと、心から心酔しておら

はじめ

れた神経解剖学の萬年 甫先生であった。その豊倉先生は、中田先生の記録を「観察の鬼というべきである」と述べておられるが、その豊倉先生も萬年先生ご自身も、私には臨床の、解剖学の、将に「観察の鬼」と思われる先生方であった。

そのお二人が私に1度も、「まだですか？」とは口にされず、豊倉先生は2003年、萬年先生は2011年に他界され、私はこの結果を報告していない。恐らく、本当の観察がどんなに厳しいものかを知り尽くしておられた故の、私への情けであったと、今言葉もなく、法外な時間を浪費し、途方もなくこの報告が遅れたことを、深く深く申し訳なく思う。

中田先生は私が遺言状を受取り、部屋を出ようとしたとき、「生田君ね」と呼び止め、「本当は僕も見



Vd N. trigem
Nc N. cochle
Vc N. vestib
K N. glosso
AK Area ner
Aec Area acu
CRST Corpus r
Atas Area fast
Flm Fasciculu
Fora Formatio
Forg Formatio
Nvd Nucl. rad
Sllcd Nucl. coc
Nllvtd Nucl. ves
Nllvtl Nucl. ves
Nllvtv Nucl. ves
Na Nucl. am
Nfs Nucl. fas
Ngfor Nucl. gig
Lm Lemniscu
Tcs Tractus
Tquths Trac
Tspthdl Tractis

たいのだよ。」と言われたあの一言の重さに耐えられぬ思いがする。今となれば、もうむこうで、中田、豊倉、萬年先生と4人で、この病変を語り合う他はない。

今 思うこと

ともあれ、中田先生の解剖を行った1975年から38年間、私はまるで亀の甲羅のように、いつもそのことを背に負い今日に至ったように思う。

この38年間の迷いと、試行錯誤を通して今思うことは、何故一気に自分はこの道を登って来なかったのだろう、という強い疑問と深い反省である。

でも密かに思いもする、今でこそ登山道という道が出来ているけれど、太古の昔、富士山に登りたいとその頂を目指した多くの人々は、どこを辿れば頂に到達できるのか解らず、登っては降り、登っては降り、あるいは裾野をただ横にさ迷っていた人々が、永く、永く続いたその末に、誰かが漸く頂にまで辿り着けたのではなかったのでは、とも思う。

中田先生の自己観察論文には、例えば、「撫でる」という感覚は単なる圧迫ではない、触れるのでもない、痛温覚など極めて複雑な、多くの感覚が微妙に調和したオーケストラのような、複合感覚と考えるべきであるなどと、実に精緻を極めた神経学的考え方で充満している。これに対し、今日知られている僅かな各種知覚伝導路の生理解剖学からしても、今回の私共の延髄病巣の神経病理学的観察はそうした中田先生のお考えからは今なお、一合目、二合目にも至っていないことを知っている。

しかし、自身ののこりも考え、頂を極めるのは遠い将来に托し、今年こそ先生との約束だけは一応果たしたことにさせて戴こうと脱稿し、今、まとめの日々を送っている。(10.10.'13記) (つづく)